



競泳コーチ林葉響子NTR第2話  
元カレとの川原野外と  
拒まれた上書き保存

競泳コーチ林葉響子の歴代彼氏たちは

なぜにNTRばかりなのだろうか？

## 第二話

元カレとの川原野外と拒まれた上書き保存

優しくとても紳士的な新しい彼氏と私の新しい毎日。

仕事場のスイミングクラブでは、生徒にバレないように目と目で通じ合ったり、SNSで気持ちを伝えあったり、週に1度くらい外食デートを楽しむ平日。土曜日の夜はモモさんの家にお泊りで日曜日は1日中一緒に過ごす。

モモさんは眠る時に義足を外す。モモさんが義足を外したら、そこからのエッチはない……。

平日はデートが終わると、必ず私のマンションのエントランスまで送ってきてくれる。「1人で帰れるよ」と言ってもモモさん曰く「大事な響ちゃんを危険にさらすのは嫌だから」だそうで。

こんな扱いに慣れていない私はくすぐったく感じてしまう。

心をくすぐられた私は「部屋でコーヒーでも」と誘うのだが「何もしないで帰る自信がないから今日はやめておくよ」と帰ってしまう。何かして欲しいから誘っているんだけど……。

週末のお泊りの時も、モモさんの手料理を食べて、色々なお話をしたり、二人で動画を見たり

して、一緒にお風呂に入って。

ベッドに入る時には義足を外してしまおう。つまりエッチがない……。

2週連続エッチなしのお泊りだったので、次の週の私は下着の選定などいつも以上に満を持しての準備だったのだが……生理になってしまった。

そしてモモさんは義足を外してベッドに入ってきた。いつものように腕枕をしてくれて私は腕に抱かれる。元カレ三橋は「生理の時はフェラで抜くのが女の義務だろ」とか言っていたので、そういうもんだと思ってしまいう自分がいる。今週の私は特にやる気になっていた訳だし。

モモさんには義務という訳ではなく、愛の形として奉仕をしたい。私は腕を抜けてモモさんのスウェットズボンを下ろした。

「響ちゃん、どうした？」

「私生理だし、モモさんに気持ちよくなってもらいたい」

「ちょっと待って」

モモさんは体を起こした。

「響ちゃん、生理だからってそんなことしないでいいんだよ。掃除とか洗濯とか、女性が、響ちゃんやらなければならない仕事じゃないんだから」

「ちがう。私が生理だからってだけじゃなくって、私、モモさんに何もしていないから、私がモモさんのこと好きだって伝えたい」

「十分伝わっているよ。不安にさせてる？だとしたら謝るよ。響ちゃんが僕を好きでいてくれてるのは十分伝わっている」

「私が口でするのは嫌だ？」

「嫌じゃないよ。だけど僕は響ちゃんを自分の性欲を満たす為に使うみたいなことはしたくないよ」

「……私が口でするのは嫌だってこと？」

「そんなこと言っていないって」

「……監視カメラの動画のせい？」

「だから……なにそれ？なんのこと言ってるの？」

「……いい、やめてよ。誤魔化さないでよ。モモさんは動画見たんでしょ？私のこと汚いって思ってるんでしょ？」

「思っていないよ。汚いって思っていたらキスできないよ」

「じゃあなんで？なんで私は好きな人に奉仕できないの？」

「奉仕とかそういう関係じゃないんだよ。僕は響ちゃんが好きで、響ちゃんも僕を好きでいてくれる。お互いを大切にしたい気持ちを大事にしようよ」

「モモさんが私を気持ち良くしてくれるのに、私はモモさんを気持ち良くさせられてないじゃん。」

不公平じゃん」

「十分気持ちよくさせてもらっているよ。僕は響ちゃんが好きだから、響ちゃんに気持ち良くなってもらいたい。僕の希望なんだよ。僕が響ちゃんを気持ち良くするのは」

「だったら私だってモモさんのことを気持ち良くしたい。そういう希望を持ちちゃダメ？女が自分からそんな風に思うのはダメ？」

「……参ったな……わかった。響ちゃん、ちょっと座って」

モモさんと私はベッドの上で向かい合って座った。

「余計なことを言って、響ちゃんに嫌われたくないけど。まずね、僕の左足の切断面は、頑張っ  
て清潔にしてもちよつと臭いんだ。だから義足を外して響ちゃんが顔を近づけると、僕は臭わな  
いかとても気になってしまふんだ。一緒にお風呂に入っているから見ているとは思うけれど、ち  
ゃんと義足を外してよく洗ってはいるけれど、どうしても一日中プラスチックの中に入れている



からね。匂いが残る。若いころの足の匂いみたいだね。だからそっちの方が気になってしまう」

「どうでもいい！」

私はモモさんの上半身を突き飛ばして寝かせ、モモさんのズボンを下げようとした。

「ちょっと待ってって。ああもう。事故に巻き込まれたときに付き合っていた女性にね、脚が臭いって言われたんだ。結構トラウマが残っている。だからね、響ちゃんがどう思うかじゃなくて、僕がそう思っちゃうんだ。理解してもらえないかな？」

「……他の女のことなんて持ち出さないでよ！じゃあ1回だけ。今夜だけ私の為に我慢して、私の好きなようにさせて。私にモモさんを愛させて。お願いだから。私を汚いって思っていないって証明してよ」

「……わかったけど、なんか男女逆転の図だね」

モモさんは自分でスウェットズボンを脱いでくれた。下着は私が脱がせた。



私は精一杯、渾身の丁寧さでモモさんを愛した。三橋にもしたことがない、誰にもしたことがない、相手を喜ばせたいという気持ちを込めたフェラをした。

熱く脈打つそれを、唇で優しく包み込み、舌先でゆっくりと這わせる。喉の奥まで迎え入れ、息苦しいほどの深さで味わう。モモさんの吐息が乱れ、指が私の髪を優しく掻き乱す感触に、胸が熱く疼いた。

太い幹を根元まで咥え込み、唾液をたっぷり絡めて上下に滑らせると、血管が浮き出た裏筋が舌に擦れ、微かな塩辛さと男の熱気が口内を満たす。喉が締めつけられるような圧迫感に、涙目になりながらも、貪るように吸い上げ、鈴口から溢れる先走りを啜り取る。モモさんの腰が微かに震え、低い呻きが漏れるたび、私の秘部が疼いて蜜を滴らせる。

モモさんのは大きいから、絶対に歯を当てないように、目一杯頑張った。唾液が糸を引き、滑りを増す中、モモさんからあふれ出る先走り汁が、私の舌を甘く苛む。

亀頭を真空のように吸い、舌でカリ首を執拗に舐め回すと、モモさんの手が私の頭を優しく押さえ、喉奥に押し込む。息が詰まるほどの深喉で、えづきながらも耐え、喉壁が収縮する感触に自分自身が興奮を煽られる。

「響ちゃん、響ちゃんのも舐めさせて……」

「私は生理だから……まだ3日目だから出血も多いし、臭いもしちゃうから」

「響ちゃんだって僕がニオイの心配について理解を求めたけれど、自分の意志を押し通したんだから、僕にも舐めさせてよ」

私は初めて生理中のアソコを好きな人に舐めてもらった。この人に隠すことはもうないなあと思いつつも、汚しちゃうとか臭わないかとかの心配と、モモさんの優しく柔らかな舌使いですごく幸せがごちゃ混ぜになって、それでも気持ちよくって……。

温かな息が秘裂に吹きかけ、鉄錆のような生臭さと混じり合う快感が、子宮の奥までじわり

と届く。体がピクピク震えてしまい、極太のモモさんの肉棒を啞えたままで、右手がシーツを強くつかんでしまうほどに、甘い痺れが全身を駆け抜ける。

モモさんの舌がクリトリスを優しく転がし、ビラビラを丁寧に剥き分け、膣口にまで入り込んでくる。出血混じりの蜜を啜る音が卑猥に響き、舌先がヒダヒダを掻き分けるたび、電気のような快楽が脊髄を駆け上がり、腰が勝手に浮き上がる。生理の重い疼きが、こんなにも甘美に変わるなんて、思ってもみなかった。

モモさんは私の口の中で出してくれた。私は好きな人の精子を飲んだ。今までは飲まない自分が気持ち良くしてもらえないから飲んでいたけれど、今夜はどうしても飲みたかった。

大好きなモモさんの精子を飲みたかった。消化して吸収して、しばらくの間、大好きなモモさんを私の体の一部にしていたかった。

ねっとりとした熱い精子が喉を滑り落ち、胃の底で溶けて私と交りあう感覚が、心地よい余韻

を残す。体の芯までモモさんの味が染み込んだ夜だった。

モモさんとはその後も仲良くできている。いつだって優しく大きな包容力で包んでくれる。

口でした日以降、前の週にエッチがなかった時には自分から「したい」と言えるようになった。けれど本当は足りない。月に2度か3度では全然足りない。私は淫乱なダメ人間なのだろうか？最低週3回はしたいだなんて、性欲過多なんだろうか？

優しいセックスも素敵だけれど、時にはめちゃくちゃにされたい。力づくで道具のように扱われない。生きていると悩みが尽きない。

＊＊

三橋と別れてから数か月間、彼からの音信はまったく無かった。大学で会う事もなく、自分も忙しくしていたので気にしてはいなかった。

私にはモモさんという素敵な彼氏がいる。とても優しく、とても頭が良くて、とても大人の

モモさんは、結婚したいと思える相手だ。付き合い始めて5か月が経過したが、その優しさでエスコートっぷりにはメロメロだ。

が……セックスに関しては優しさ故に優しいセックスであり、穏やかにゆっくりと時間をかけて楽しむタイプだ。問題は月2回から3回と回数が少ない点だ。そこが自分の中での不都合である。今はまだ、私から気分の赴くままに「やりたい」と言える関係まで進んでいないので、それなりに欲求不満状態ではある。モモさんに言ったところでそれが叶えられるかはまた別の話だけだ。

優しいモモさんにイライラする要素はないはずなのに、自分のどこかでモモさんに対してイライラしてしまう。絵にかいたような欲求不満だ。

そんな時に三橋からメールが届いた。SNSは友達リストから抜いたし、拒否相手に指定しているのもメールになる。無題で本文には「相談がある。次の日曜日、河原のバッテリーセンター

ーの鉄橋の下に15時」と書いてあった。

あいつは本当に自分勝手に、私の都合とかは考えないのであろうか？メールに一言「なに？」と返信すると、「会った時」と一言で返ってきた。自分も一言のメールを送ったが、相手からの一言メールにムカついた。

私は東京生まれだが、親の教育方針で大学に入学してからはワンルームマンションで一人暮らしをさせてもらっている。家賃や光熱費は親が出してくれているので、自分のバイト代から出すのは、趣味ともいえる好きな洋服を買うとか遊びのお金だけだ。授業料も親が持ってくれているので、世間知らずの甘えん坊呼ばわりされても返す言葉はない。将来の為に貯金を始めてはいるけれど。

三橋からメールが来たとしても、ここ最近の私の週末の過ごし方であれば、土曜日の昼頃から一晩泊って、日曜日の夜までモモさんと一緒にいるから当然行かないことになる。だが運が悪い



ことに、今週はモモさんの親族が緊急入院したということで、実家がある北海道に戻っている。

金曜日夜の飛行機に乗ったので、今週はお泊りができなかった。仕方がないので日曜日の午前中は、最近溜めてしまっていた家の掃除や平日にできない生活全般の片づけをした。

お昼過ぎ位から着ていく服を選んでいる自分がいる。ミニスカートにするべきか、ユーズド加工で穴が開いているデニムにするべきか。



自分でもわかっている。モモさんがいるのに三橋に会って良いのか？それでも洋服を選んでしまう自分がいるし、洋服を着る前にシャワーを浴びる自分、そして三橋が好きだった黒いレースの下着をつけている自分に幻滅する。

私は何を考えて、何を期待しているんだろう？ヨリを戻したいとは思っていないのに、なぜシヤワーを浴びて、彼が好きだった下着を身に着けて、彼が好きだったミニスカートを着てオシヤレしているんだろう？

13 ところには家を出て、気になっていたカフェでランチを食べた。日曜日のこんな時間はカップルが多い。普段であれば私もモモさんと一緒にいる時間だ。別れた男の相談に乗るだけなのに、正直テンションは上がっている。ランチの後は洋服を見たりCDを見たりして、15分早く約束の場所についた。三橋は遅刻の常習者だったので、しばらく待つだろうなと思っていると、約束の河原に大の字に寝転がり、のんきに昼寝をしていた。

「で、あんたは何で寝ているの？」

ぶっきらぼうに聞いた。目を覚ました三橋は私に目を向けて下から上に視線を動かした。

「来たんだな。まあ座れって」

そういうと三橋はあぐらをかいて座った。定期的に電車が鉄橋を通る音と、近くのバッテリーグセンターから「カーン、カーン」と金属バットでボールを打つ音が聞こえる。私は三橋の隣にひざを抱えて体育座りのように座った。

「で？相談て何？」

「いやさあ、大学の同じ学部の男友達の女からちよっかい出されてるんだけどさ、どうしたら良いもんかなと思ってね」

三橋は自分の膝を叩きながら言った。

「は？そんな相談するかなあ？昔の女に」

三橋を睨んで言った。

「いやさあ、結構いい女なんだよ。付き合う女じゃないけれど、やってもいい女っているじゃん？」

「やってもいい女っているじゃん？とか言われても」

「響子はやってヨシ、付き合ってヨシな女だけど、その女は付き合うにはちよつとバカだから嫌なんだよ。だって自分の男の友達に手を出す女だぜ？」

「ちよつかい出されてるって、あんたが勝手に勘違いしてその気になっているだけじゃないの？」

「だってお前、俺の友達である自分の彼氏とのデートに行くのに、下着どっちがいいか？とか自撮り写真をSNSで送ってくるか？ふつう？」

そういうと三橋は自分のスマホを操作して、その写真を見せてきた。

「うわあ……あり得ない……」

「これだけじゃなくて、何人かで飲んでる時にテーブルの下で俺の足に足を乗せてきたり、最近偶然学内で会うこと増えたしよお。こないだだって」

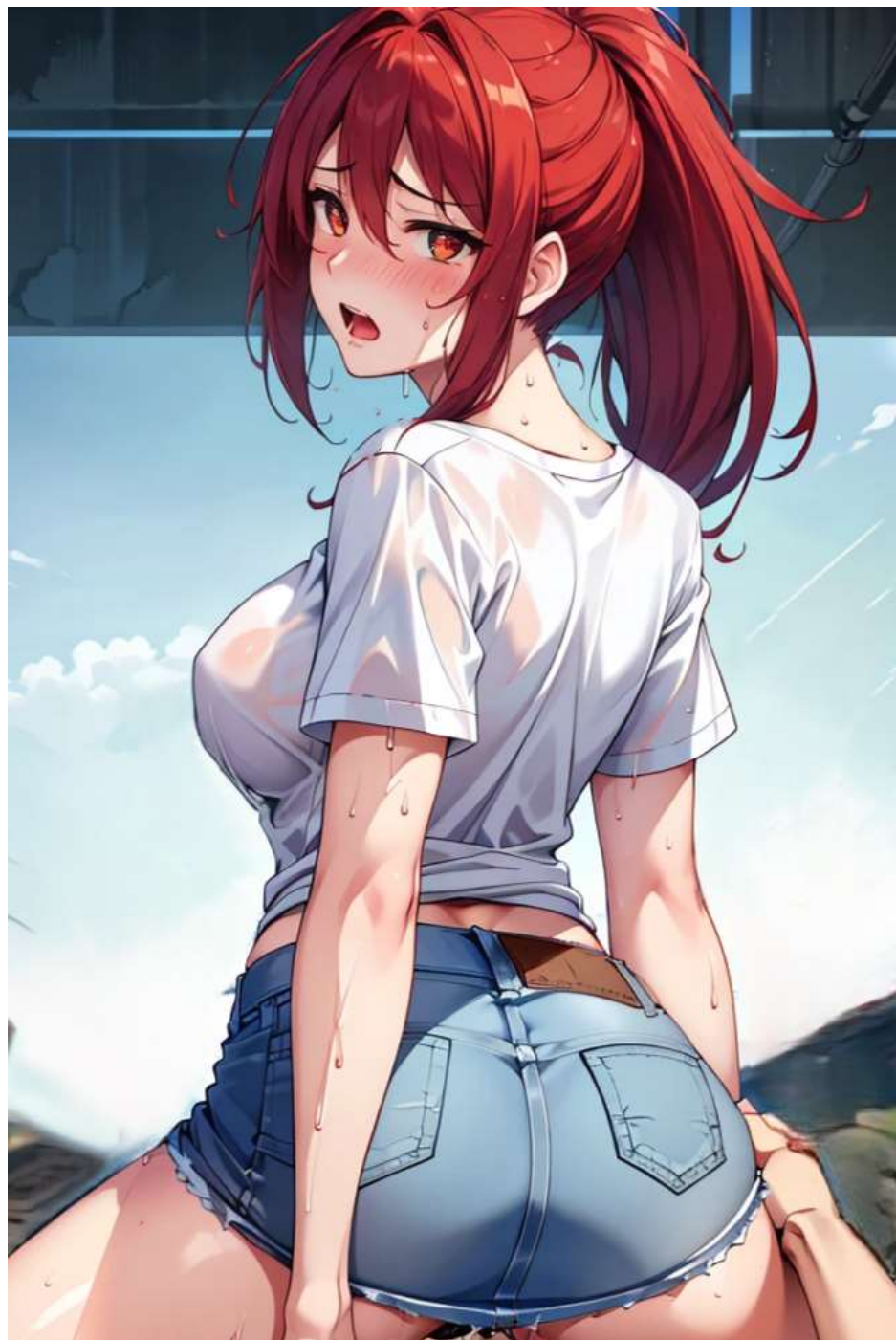
言いかけたところを私は遮った。

「はいはい、もういいです。そんなやばい女関わらなければいいじゃん。あんた突き放すの得意でしょうが」

「けどさあ、これがさあ、見た目は結構いい女なんだよ。お前が苦手だったバックでパンパンやったら良さそうなケツしてるんだよな。丁度よい肉付きの丸いケツでさあ」

そういうと三橋は両手で空中のお尻をつかんで手を前後させてバックのふりをした。

「やりたきゃやればいいじゃん。あたし関係ないからどうぞ好きにしてください。まったくバツカみたい。帰るわ」



そういつて立ち上がると強い力で手をつかまれて引き戻された。私はバランスを崩して三橋の上に覆いかぶさるように着地した。

三橋は私の目をじっと見た後、唇にキスをしてきた。数秒間、私は手を振りほどいて立ち上がろうと抵抗したけれど、三橋の舌が私の口の中に入ってきた時にあきらめた。私は三橋の上に女性上位の体位のように乗り、三橋の口の中に自分の舌を挿し入れた。

三橋の唾液が私の中にとめどなく入ってくる。私はそれを飲み込む。もっと、もっとと三橋の唾液を欲しがるように、私の舌は、三橋の口の中を泳ぐように動く。ねっとりとした粘膜の感触が、口内を熱く濡らし、息継ぎの合間に漏れる吐息が、甘酸っぱい渴望を煽る。

舌の根元まで絡め取り、互いの唾液が混じり合う卑猥な液音が、耳元で響く。

私は無意識のうちに三橋のズボンの中の硬くなった陰茎に自分の秘部を押し付けていた。キスを続けたままで、三橋も腰を動かして、固くなった陰茎を押し付けてくる。布地越しに感じる熱



い脈動が、下着のクロッチをじつとりと湿らせ、秘裂の奥が疼き始める。硬い輪郭がクリトリスを挟るように擦れ、蜜が溢れ出して太腿を伝う感触に、腰が勝手にくねってしまう。

三橋は手で私の頭を陰茎に誘導した。私は三橋が履いているズボンのベルトを外してチャックを下げた。

「響子飢えてんな、そんなに欲しかったのかよ、これが」

私は三橋を睨みつけた。睨みつけながら勃起した三橋の男根を咥える。

シャワーを浴びてきたわけではない三橋の陰茎は、独特の男性臭がしたが私は構わず咥え続けた。ひざ下の短パンを履いていた三橋の膝に私の秘部を押し付けたり、こすりつけたりしながら、三橋の男臭い男根をしゃぶっていた。

汗と尿臭が混じり合った、むせ返るような匂いが鼻腔を満たし、喉を滑る硬い感触が、吐き気と快楽の狭間で体を震わせる。亀頭を唇で挟み、舌で裏筋を執拗に舐め上げると、鈴口から滲む

カウパー液の生臭い味が舌に広がり、肉棒を喉奥まで押し込まれるたび、えずきが込み上げて涙が溢れる。

「お前パンツの上からでもわかるくらいグチヨグチヨになってんじゃん」

三橋は絶妙な強さで膝を持ち上げて、私の秘部に圧を与えてきた。私は無我夢中で三橋の男根を喉の奥まで飲み込みながら、彼の膝に秘部を押し付けている。

膝の骨がクリトリスをえぐるように刺激し、蜜を溢れさせ、下着をべつとりと汚す。膝のざらついた感触がビラビラを擦り、電気のような痺れが下腹部を駆け巡り、喉の締めつけが男根をさらに硬くさせる。

三橋の男根を舐めながら、手で握りこすり始めると三橋が言う。

「だから手なんか使っちゃって何度言わせるんだよ。こするなんて自分でもできんだろ。ちゃんと口だけで仕事しろよ」

私は手を三橋の両腰において、頭全体を前後させた。男根の裏を舌でレロレロと舐めたり、龟头をハーモニカでも吹くように左右に吸いながら動かしたり、三橋に教えられたことを続けた。血管の浮き出た裏筋を舌先で執拗に辿り、鈴口から滲む先走りを啜るたび、喉が熱く痺れ、自身の秘部が寂し気にヒクヒクと収縮する。

唾液が糸を引き、男根全体をべっとり濡らし、吸い上げるたび「ジュポジュポ」と卑猥な音が響き、喉壁が収縮して男根を絞り上げる。

「響子、出すからちゃんと飲めよ。全部飲めよ、わかってるよな」

三橋は私の頭を強く押さえつけて自分でも腰を振り、私の口の中で射精した。腰をピクピクさせた三橋はしばらく経つと、強く押さえつけていた手を外し、ポンポンと2回私の頭を軽くたたく。「ありがとう」とも「気持ち良かった」とも「愛している」とも取れる合図だ。

脈打つように噴き出した熱い白濁液は、舌の上に広がり、苦くねばつく味が口内を支配する。

溢れた精液を唇の端から垂らし、それを自分の指先で拭って舐めとる。

「ちゃんと飲んだか口の中見せろ」

三橋に言われて、口を開いて見せた。

「オーケーオーケー。チンポに残ってる精子も吸いだしてくれよ」

私は再び三橋の小さくなった陰茎を口にくわえて、残った精子を丁寧に吸い出した。柔らかくなつたそれを、真空のように吸い上げ、微かな残滓を舌で拭い取る感触が、屈辱と興奮を同時に呼び起こす。

舌で尿道を優しく舐め回し、残液を一滴残らず啜り取ると、男根が再び膨張し始める。

「もっとゆっくり丁寧にしろよ。しばらくさせていない間に下手糞になつたんじゃないか？」

私はさっきよりも丁寧に、陰茎を優しく吸う。三橋の陰茎は、すぐに固くなってきた。復活する硬さが口内で膨張し、再び脈打つ熱気が、喉の粘膜を焦がす。カリ首を唇で挟み、舌で優しく

転がすと、低い喘ぎが漏れ、男根がビクビクと跳ねる。

「響子、パンツずらして俺の上に乗って挿入れさせろ」

そう言う私の体をグツと持ち上げ陰茎の上に乗せ、抱き合って座る形になった。

私は自分でパンティーのクロッチ部分を横にずらして、既にどうしようもないくらいグチュグチュに濡れている私の蜜壺に、三橋の固くなった男根をあてた。

入り口を先端でなぞられ、蜜が糸を引いて滴る感触に、腰が勝手に期待する。ビラビラが亀頭に擦れ、クリトリスが熱く疼き、膣口が収縮して男根を誘う。

「ほら、お前はホントちゃんぽ好きだな。ちゃんぽなら誰のでもいいんだろ？」

そういうと三橋は下から腰を上げて、クリトリスに強く男根をこすりつけてくる。

私のクリトリスに三橋の亀頭が触れると私は全身に快感が走った。私は顔を上に向けて声をかみ殺した。三橋は構わず下から腰をかし上げてくる。

私は声が出ないようにするのが精一杯。硬い亀頭が敏感な芽を潰すように擦れ、ビリビリとした痺れが脊髄を駆け上がり、目の前が真っ白になる。蜜が飛び垂れ流れ、男根をべつとりと濡らし、擦れるたび「クチュクチュ」と液音が響く。

「ほら、舌を出せよ」

三橋に言われるがまま、顔を向けて舌を出した。

三橋はリズムカルに腰を動かし、男根でクリトリスを刺激しながら、私の舌を吸ってくる。熱く硬い男根を、私のクリトリスと秘部のビラビラが欲しがっている。

私は無我夢中で強く押し付けながら、腰を前後に振り続けた。肉厚な裏筋がビラビラを割り、蜜を掻き出すたび、卑猥な液音が耳を犯す。

舌を吸われ、唾液が糸を引き、互いの息が混じり合う中、クリの痺れが頂点に近づく。

そう、これ。この雑で荒っぽいキスと熱くて硬い三橋のおチンポ。

自分勝手に自分の快樂だけを要求してくる三橋に従ってしまうのは、三橋のせいであって私が望んでいるのではないという言い訳と、私が普段着けている強気のペルソナが抑圧している影の自分を、力づくで押さえつけられるという代償行為で開放し、私の無意識下にあるバランスを保とうとしてしまうから。

だから私はこの人の言いなりになってしまう。人に見られる場所である事や、三橋がすでに別れた男である事や、モモさんという優しい彼氏がいる事など、一切考えられない。何も考えられなくなっている。

「幸男……挿入したい……」

私は思わず彼の名を呼んだ。自分でも止められないほどに腰を前後させていた。服従の証のよう、その名を零す瞬間、秘壺が貪欲に収縮し、さらなる渴きを煽る。

クリトリスが擦れる快感に、私の中心部に幸男の男根を飲み込みたくてたまらない。

「お前はこのちんぽが好きだな。生でも挿入したいのか？」

「挿入れて、お願い、挿れて……」

「欲しいんだったらお願いが先だろ？お前はそういうところないよな」

「お願い、挿入れて下さい、ここで生で挿入れて下さい……」

「どんなふうにお願ひするかちゃんと教えたよな？もう忘れたのか？もつと丁寧にお願ひされないと挿入られないよ？」

「お願ひします。幸男のおチンポで私のおマンコをかき回してください。欲しいです。何でも言うこと聞きます。おチンポ下さい……」

「響子はやればできるのにな。自分で挿れてちゃんと腰振れよ」

「ありがとう、ありがとうございます……」

私は腰を少し後ろに引いて、蜜壺の入口に幸男の亀頭を当てた。私は右手を添えて幸男の男根



を私の蜜壺に「ヌブツ」と挿入れた。

「はぁぁぁん……」

思わず声が出た。身体が満たされていく。

幸男は私の洋服の上から雑に力強く胸をもんだ。感覚としては痛いくらいなのに、ますます身体に走る電流が強くなる。

